

4. バンダ・アチェにおけるインタビュー調査の実施

災害対策室 木村玲欧

■なぜ社会学者が災害・防災研究か？

都市巨大災害は自然現象と社会現象の両側面をもつ。なぜなら災害は、人々や構造物への物理的被害だけにとどまらず、社会制度、組織・集団、人々の心身や日常生活など、社会的・心理的側面にわたっても甚大な影響を及ぼすものだからである。そのため災害という現象を解明するためには、1) 地震・津波等の現象とそれがもたらした影響の自然科学的解明、2) 人々や社会に与えた影響と被災者の生活再建過程の社会科学的解明という、自然と人間・社会の双方の立場からのアプローチが必要不可欠である。

ところがこれまでの災害研究は理学・工学的解明が中心であり、「被災者がどのように災害を受け止め・乗り切ったのか」「次に災害が起きたときにより効果的な生活再建に結びつけるためには、自助・共助・公助レベルで何をしていけばよいのか」といった「人間の復興」に焦点をあてた研究は、阪神・淡路大震災以降はじめて世界で注目された分野であり、研究者もわずかで研究実績も少ない。

2004年12月26日、M9.0という超巨大地震がインドネシア・スマトラ沖にて発生した。一番被害が大きかったインドネシア・スマトラ島・アチェ州においては、死者・行方不明者あわせて24万人を超えた。アチェ州の中心であるバンダ・アチェ市では平均14mの津波が海岸を襲い、死者・行方不明者ともに計測不能の状態である。名古屋大学田中重好・木村玲欧は、社会科学的視点にたち、被災者への構造化インタビュー調査を通して、「なぜこのような大きな被害が発生したのか」「被災者は津波をどのように受け止めているのか」「コミュニティは生活再建においてどのような役割を果たしているのか」等について、日本とインドネシアの文化的・歴史的背景を考慮しながら解明し、その結果を日本・インドネシア両国における防災対策に役立てることを最終的な目的とすべく本調査団に参加した。



図1 Syiah Kuala 大学 (UNSYIA) 内の避難所。この避難所は学生自治会が運営していた。

■仮説探索型（ヒューリスティック）の現地調査

地震から1ヶ月が経過した時点において、社会科学チームがインドネシアへ向かうのには理由があった。それは「1ヶ月ほど経過すれば、災害という現象に対して客観的に見ることができる被災者も多くなるし、避難者の生活もある程度落ち着いてくるだろう(参考：図1)」という予測であり、「これくらいの時期にいけば、被災者の記憶も鮮明だし、被災者・避難者として暮らしている毎日の生活における喜怒哀楽について、生活再建への意気込みと課題について、現時点でのコミュニティの役割についてもオンタイムで聞くことができる」という希望的観測であった。

災害研究では、震災後3・4日が過ぎたころから震災後2ヶ月ごろまでを「災害ユートピア」と呼び、この時期においては被災者がそれまでの社会的地位や役割とは関係なく「みんなで復旧・復興に向かってがんばろう！」と力を合わせている時期だとされている。この時期に被災地に行けば、人々の被害のようすや、人々が新たな日常生活を取り戻すべく奮闘している姿を見ることができる。そのような現実から「次の災害に対して何が課題になるのか」を考えることができるという思惑があったからである。

出発に際して、一部の人々から「この時期にインドネシアに行っても、防災にどのように活かせるのかがわからないから行くべきでない」「名古屋大学は地元のことで手一杯であり、遠くインドネシアのことに関わっている暇も必要もない」というような意見もあった。しかし、『今どのように活かせるのかがわからない』といっても、一体いつになったら防災に活かせるようになるのかの明確な答えはなく、防災のようなフロンティアの分野における課題は、消極的な姿勢でじっとしているよりも、こちらから出かけていき問題を自分たちの手で探しだす姿勢が必要である」「名古屋の防災を考えるには、名古屋のことだけを見ていても決して完成されるものではなく、むしろ様々な地域・文化特性における災害を比較検討することによって、はじめて名古屋が取り得るべき課題が見つかるのではないか」という結論に達して、インドネシアへと出発することになった。

■フレームワークの共有をしなければ半構造化インタビューはできない

さまざまな経緯があったものの、2005年2月5日～13日まで、今回の災害で最大の被害を被ったスマトラ島アチェ州・バンダアチェ市において調査を行った。名大6名、バンドン工科大学1名の調査団を結成し、現地の国立大学である Syiah Kuala 大学(UNSYIA)の研究者と協力しながら、「なぜ津波が発生したのか」という自然科学的な視点と、「地域の防災力をどう高めるか」という社会科学の視点の両方を持ちながら、津波・地殻変動調査と被災者への聞き取り調査を行った。

田中重好・木村玲欧は「社会科学チーム」として、津波被災者に対する半構造化インタビューを行った。半構造化インタビューとは、一定の質問にしたがい面接を進めながら、インタビュー対象者の状況や回答に応じてインタビュアーが何らかの反応を示したり、質問の表現、順序、内容などを臨機応変に変えることのできるインタビュー方法である(保坂

他(2000))。田中・木村ともに、日本で発生した災害被災者へのインタビュー調査は多く行っているが、海外においてはほとんど行っていない。

今回のインタビューを行う際には、言語的問題(現地は公用語であるインドネシア語と、インドネシア語とは全く異なる言語体系をもつ地元のアチェ語が併用して用いられている)と、文化・宗教的問題(アチェ州は、ほぼ 100%イスラム教徒であり、インドネシアで唯一イスラム法が適用されている地域である)の 2 つの大きな壁があった。そのために、バンドン工科大学で政治人類学専攻を専攻している Suhirman 講師と、現地 Syiah Kuala 大学で農業経済学を専攻している Fajri 農学部長／教授と協力してインタビュー調査を行った。

インタビュー調査を行う際には、インタビュー・フレームワークが必要である。申請者が阪神・淡路大震災を事例として行った研究などにより、被災者の意識・行動の基本となる心理的時間は対数軸上に展開し、10 時間、100 時間、1000 時間といった節目の時間が意識・行動の転換点となることが明らかになっている。今回はその考えに基づき、アチェにおける被災地調査を踏まえながらフレームワークを設計し、5 フェースにおいて、7 大項目・20 中小項目の質問を設定した。このフレームワークについて、インドネシア側の研究者と歴史文化的・宗教的背景をもとに議論し、最終的に合意に達し、フレームワークを共有することによって、初めて半構造化インタビューを行うことができた(表 1・2 および図 2)。

表 1 インタビュー・フレームワーク(日本における災害研究の知見をもとに、アチェにおける最初の 2 日間の被災地調査を踏まえて木村・田中で作成した)

Interview Framework (オリジナル(日本語)版)	
Time	
EQ	1. 地震のとき 1-1. 地震のゆれをどのように感じましたか 1-2. 地震が起こったときに「津波」について考えましたか (アチェの言葉で津波をどのように言うか知っていますか) 1-3. 地震のゆれがおさまったあと何をしましたか
TSUNAMI	2. どんな被害にありましたか 2-1. 家屋の被害 2-1-1.津波は家のどこまで来ましたか 2-1-2.木造住宅でしたか／非木造住宅でしたか 2-1-3.何階建ての建物でしたか 2-2. 家族で被害を受けた方はいましたか 2-3. 地域のコミュニティーに被害はありましたか 2-4. 毎日のお仕事に被害はありましたか
2-4days	3. 地震・津波の後の数日間 3-1. どんなことをしましたか 3-2. 誰としましたか 3-3. なぜそのことを行おうと思ったのですか
1-2weeks	4.人々から受けた支援について 4-1. どんな人から 4-2. どのような支援を受けましたか 4-3. 不足している支援はありますか
Now	
1months	5.地域のコミュニティーについて 5-1. 災害時に地域のコミュニティーはどのような役割を果たしていましたか 5-2. 災害によって新しいコミュニティーはできましたか 6.日常生活に戻ることにについて 6-1.住んでいた場所に戻りたいですか／それはなぜですか 6-2.もとの地域のコミュニティーに戻りたいですか／それはなぜですか 7.今回の経験を通して津波についてどのようなお考えを持っていますか



図 2 表 1 をもとに、歴史文化的・宗教的背景を踏まえながら、現地研究者とフレームワークの共有を図る(2月9日 UNSYIA にて)

(左から、木村、田中、Fajri、Suhirman、(ここまでが社会科学チーム)、Glenda(オブザーバー参加)(敬称略))

表 2 両国研究者が合意によって共有されたインタビュー・フレームワーク(英語)

インタビューはこのフレームワークに沿ってインドネシア語(一部アチェ語)で行われた

Time	
EQ	1. During/immediately after the EQ shaking 1-1. Where were you, When EQ shaking? 1-2. How did you feel about the shaking? 1-3. Did TSUNAMI idea occur to you immediately after the EQ shaking? 1-4. What did you do after the EQ?
TSUNAMI	2. Where were you, When TSUNAMI coming 3. How could you or your family safe from TSUNAMI? 4.. Damages from EQ and TSUNAMI 4-1. Housing damage 4-1-1. How high was TSUNAMI when it came to your house? 4-1-2. Wooden houses or Reinforcing building 4-1-3. How many stories 4-2. Injury to family (family structure) 4-3. Effect to local community 4-4. Effect to job/everyday work (occupation)
1 hour-4days	5. Response in 1 hour- 2 days 5-1. What did you do? 5-2. With whom? 5-3. Why did you do?
2-4days	6. Response in 2-4 days 6-1. What did you do? 6-2. With whom? 6-3. Why did you do?
1-2weeks	7.Support during recovering from the disaster 7-1. Who? 7-2. What kind of support? 7-3. Shortage
2months	8.Role of local community 8-1. Role of community you belong to during the disaster 8-2. Is the new community created by the disaster?
	9.The way/effort to rebuild to everyday life 9-1. Did you go back to place you lived before disaster? The reason? 9-2. Did you go back to community you belonged before the disaster occurred? The reason?
	10.What did you think about TSUNAMI?

■半構造化インタビュー調査の実施

インタビュー調査は、共有されたフレームワークにのっとり、インドネシア語（一部アチェ語）で行った。インタビュー終了後に、インドネシア側研究者から英語で簡単な概要の説明を受けた。インタビューは対象者の個人差にもよるが、フレームワークの質問をすべて聞き終わるまでに、約1時間程度を要した(図3)。

インタビュー対象者選定について、以下の3点について両国研究者間で合意がなされた。

- 1) 男女同数になるように選定する、
- 2) 20代～60代程度まで各年代まんべんなく選定する、
- 3) 被災時に居住していた集落も西海岸から東海岸までまんべんなく選定する（一つの集落に集中しない）

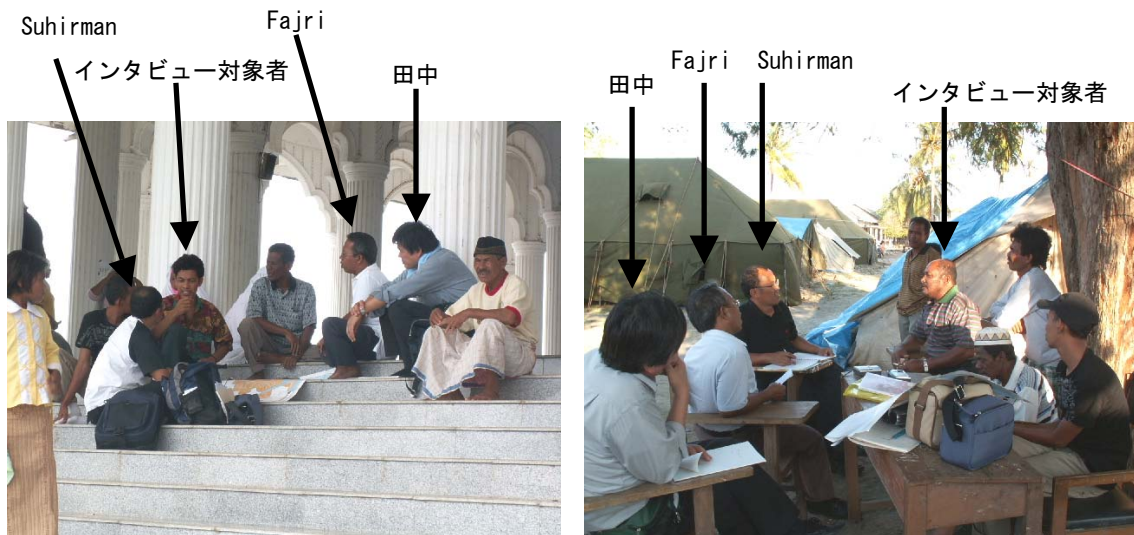


図3 インタビューは Suhirman 氏（メイン）・Fajri 氏（サブ）によって行われた「モスクで行うのがもっとも素直な気持ちになれてよい」という Suhirman 氏の助言（これはイスラム圏の常識らしい）もあり、モスクで行われるインタビューも多かった。

特に3)については、少なくとも調査団が訪れたアチェの避難所では、基本的にコミュニティがまるごと1つの避難所に移動している例がほとんどであり、1つの避難所のみでインタビューを行うと、似通った地域の被災者ばかりをインタビューする危険性があった。そのため、インタビューを行う際には、バンダアチェ市郊外を含めて市内のさまざまな避難所でインタビューを行った。地元の研究者と共同研究をしたこともあり、地の利を活かして、外国人・アチェ出身者以外の人間ではなかなか入り込むことができないような地元地域の避難所においてもインタビューを行うことができた。インタビューは2月9日～11日までの3日間に渡って、計11件のインタビューを行うことができた。



図4 写真左：沿岸部(奥が海)、津波によって住宅街はさらわれ道路しか残っていない
写真右：海岸から3kmほど離れたところ、津波で流された瓦礫・小型船と汚泥の山になっていて、住宅密集地だったこの地の復旧の目途はたっていない



図5 写真左：避難所の運営所、学生自治組織が運営している
写真右：訪問(釈明)時に運営所にいた広報責任者(右端)、実はFajri氏のゼミ生であったため事なきを得た。この偶然にはFajri氏も驚いていた。

バンダアチェ市内は、被害のない内陸部(海岸から5km以上内陸部)では日常どおりの生活が営まれているように見えるが、市の中心部であるグランドモスク周辺(海岸から3kmほど内陸部)及び、それよりも海岸に近いところでは、依然として住まいも暮らしもできない状況が続いている。特に、沿岸部においては、津波から1ヶ月が経過した調査時点においても、津波にすべてがさらわれてしまって瓦礫化していたり、瓦礫や汚泥が幾層にも重なっていて片付けも土地利用も全くできなかったりという状況であった(図4)。避難所は市内のいたるところにあり、それぞれの避難所によって運営母体が違っていた。特に、インドネシアの大学学生自治組織が、直接、外国政府やNPO・NGOからの支援を受けて運営している避難所があり、そこでは学生が自らパトロール隊員となって自治を守っているところもあった。ある避難所では「キリスト教系の組織が勝手に入りこんで、強引な布教

活動をしている」という噂(デマ?)が飛び交っていることもあり、調査中にパトロール隊員によって詰問され、運営事務局に釈明をしに行くこともあった(図 5)。地元の研究者と共同作業をしていたために事なきを得たが、「これが外国人のみ(アチェ出身者以外のみ)であったらこうはいかなかった」とホッとした場面もあった。

■インタビュー調査の内容

インタビューは計 11 件行われたが、インタビュー・フレームワークに沿った詳細な分析は今後行っていく予定である。日本側研究者も、インタビュー終了後に英語で簡単な説明しか受けていない。従って、下記は英語での説明を日本語に訳したものであり、今後のインドネシア側研究者とのやりとりで出来上がってくる詳細なレポートと照らしあわせた時に事実と食い違う可能性があることを最初に記しておく。

ここでは 11 件のインタビューの中から、印象的な 3 件を取りあげる（なお別の 1 件について、田中重好教授のレポートで取り上げられている）。

インタビュー 1（図 6）：

リキさん。46 歳男性。バンダ・アチェ市の沿岸部（報告書表紙の写真付近）の木造住宅に家族 6 人（妻・息子 2 人・娘 3 人）で住んでいた。

リキさんはトラック運転手をしていて、地震時には市の中心部の市場にいたが、地震のゆれを感じて家族のことが気になり、急いで自宅のある沿岸部へと向かった。沿岸部へ帰ったのは地震で驚いたからであり、まさか津波が来るとはこのとき夢にも思わなかった。しかし自宅に戻る途中、大きな波が海岸からやってくるのを見て、ココナツの木によじ登り、木の上から自分の集落や自分の家族が住んでいる家が津波によって流されていくのを目の当たりにした。自分以外の家族 5 名は未だに行方不明のままである。

現在はバンダ・アチェ市内の避難所で生活している。避難所における集落のまとめ役のようなことをしていて、物資の配給の連絡をしたり、他の人々の相談に乗ったりしているが、そんな時にも家族のことがずっと心から離れないままにいる。

インタビュー時も、ちょうど物資の配給があった時で、他の被災者が配給の列に並んでいたのに対し、リキさんだけは独り離れたところにぽつんと立っていた。インタビューに応じてくださった際にも「まだ心の整理がついていないので、自分の状況を淡々と話すことしかできない」という状態であった。

インタビュー 2（図 7）：

マダリナさん。バンダ・アチェ市から少しはずれた西海岸に住んでいた。集落は 1 万人ほどで、集落の後背は山になっている。マダリナさんは地震のあと、「自動的に」近くにいた子どもを小脇にかかえて、山の方へ走っていった。そして彼女の生まれ育った集落が波によってすべて無くなっていくようすを、山の上から見るようになった。山に逃げたのは



図6 インタビュー1（リキさん）



図7 インタビュー2（マダリナさん 左写真・矢印の女性）

50人ほどであった。残りの9950人は津波によって飲み込まれた。「なぜ山に走っていったのかはわからない」とマダリナさんは言う。「とにかく地震のあと『自動的』に山に向かって走っていった」。

その後、山に逃げ延びた50人は、水が引かなかったこともあり、2日間山の中で飲まず食わずの状態ですごした。3日目に外からやってきた人(誰だかわからず)が集落の人々を避難所へと連れていってくれた。

彼女の家族は10人だが、6人が死んで4人が生き残った。しかし「私たちは幸せ」とマダリナさんは言う。「近所の人はずべて死んでしまった。それに比べれば6人しか亡くならなかった私たちは、アラーに感謝しなければならない」。

インタビュー3（図8）：

モハマ・ムスマンさん。59歳・男性。職業は教師(現在は直接学生を指導する立場ではなく、教育委員会の委員長のような職)をしている。バンダ・アチェ市の西端の集落(西海岸近く)に住んでいた。自宅は鉄骨の2階建ての建物だった。

地震時には家族5人(妻・息子3人・娘1人)も含め自宅にいた。2回目の地震のあと、水が海からやってくるのが見えた。そこで、車(妻・息子2人)とバイク2台(息子・娘)にわかれて、とにかく水の来ていない内陸部へ内陸部へと逃げていった。この集落は、西海岸と北東のバンダ・アチェ市沿岸からの津波が合流した地域であり、モスクを除いてすべてが破壊されてしまった(図8のインタビュー場所が残ったモスク、図9は衛星画像で見た集落周辺状況)。集落は津波時には2000人いたが、現在は670人が生き残っている。

「車・バイクに乗ったために我々は助かることができた」とムスマンさんは言う。しかしムスマンさんの家族も1人亡くなった。それはバイクで逃げた娘さんであった。娘さんはバイクで逃げる途中、忘れ物をとりに再び家に戻ったという。「娘は大学を出たばかりで、先生になるのが夢だった。逃げる最中に大学の学位記を持ってくるのを忘れて、家に取りに帰ったところを津波にやられてしまった」。「子どもたちの中で、はじめて大学を出た子どもで、しかも先生になることがよほどうれしかったのだろう。だから学位記をどうしても持って行きたかったのかかもしれない」。

現在は、残ったモスクの周りにテントが張り巡らされ、避難所となっている。ムスマンさんもその中に住んでいる。集落の長(GEUCHIK グチ)は今はこの場所には住んでいないが、しばしば訪れてくれるので特に不満はない。



図8 インタビュー3（ムハマ・ムスマンさん）

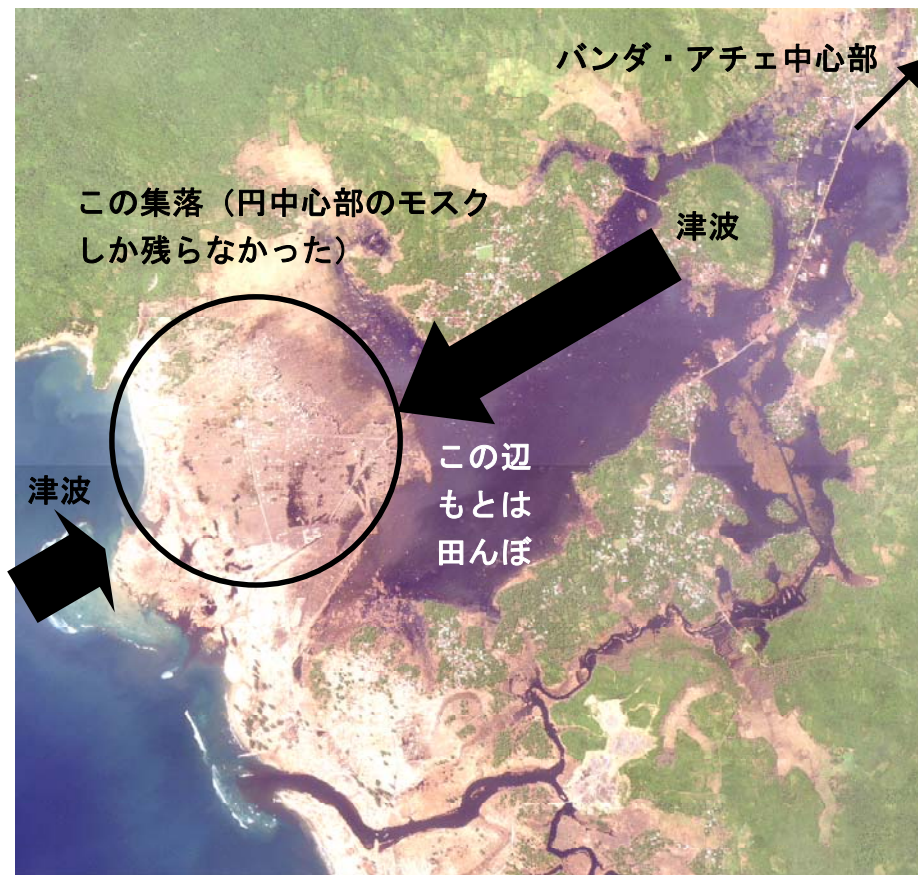


図9 集落と津波被害の関係

■今後の展開：継続的な調査で、総合学術研究・国際貢献を目指す

今後の展開として、以下の2点のことを計画している。

1点目は、インタビュー調査によって「被災者が災害をどう受け止めているのか」「そこからどのように立ち直ろうとしているのか」「コミュニティはどのように働いているのか」という知見・教訓を整理・体系化して、日本・インドネシア両国、更には諸外国に広く発信し、人々の地震津波連想と防災への意識向上を図ることである。

バンダ・アチェの調査によって、「アチェはもともと都市構造的に津波という外力を想定していなかったために、都市の中心地域・居住地域まで被害地域となっている」ことがわかった。また「津波という事象が伝承されていなかったために避難行動が発動されず、海岸沿いの集落では軒並み生存者率10%以下であった」こともインタビュー調査によって明らかになった。このような中で被害を受けた被災者が「災害をどうとらえ」「壊滅的な被害からどのように立ち直ろうとしているのか」という知見・教訓について世界に広く発信していくことで、人々の地震津波連想（地震が起きたら津波を思い出す認知構造）を構築し、防災に対する意識向上に寄与することが考えられる。

現在、インタビュー内容は、現地 UNSYIA の協力を得てインドネシア語でテープ起こしをしてもらっている。この原稿を更に、日本にいるインドネシア留学生の協力のもとに日本語に翻訳する予定である。この知見・教訓をわかりやすい形でまとめ、日本とインドネシア両国において書籍等のかたちで広く発信をしていきたい。また、Suhirman 氏の協力のもと、インタビュー・フレームワークの各設問について、エクセル型式でまとめてもらっている。この知見についても社会統計学的な分析を行うことで、科学的な知見へと昇華させていきたい。

2 点目は、同じ被災者に継続的にインタビューすることによって長期的な復旧・復興過程を明らかにすることである。

スマトラ沖地震のような壊滅的な巨大災害においては、津波によるインパクトは瞬間的・短時間だけではなく、そこから都市・経済・生活を再建させていくまでの復旧・復興過程は年単位の長期にわたることが考えられる。このため、調査は短期間で終了するのではなく、長期にわたって継続的に復旧・復興過程を追っていくことが、津波災害や津波災害における防災の全体像を明らかにする唯一の方法であることが考えられる。このような観点から調査団は、長期にわたって継続して調査研究を行うことを計画している。社会科学チームにおいても、ファンド等が得られればバンダ・アチェを定期的に訪れ、継続的なインタビュー調査を行うことを計画している。さらに、前回調査の際にインタビュー対象者の住所を聞いていて、同じ被災者に継続的にインタビューを行うことを可能にしている。ある 1 人の人間が新たな日常生活を築き上げるまでの長期的過程について明らかにしていきたい、これらの知見をもとに効果的な災害対応のあり方を提案していきたい。

今後も、現地のインドネシアの大学と協力することによって、この研究を国際共同研究・本格的な総合学術調査へと発展させたいと考えている。

参考文献

保坂亨・中澤潤・大野木裕明(編著), 2000, 「心理学マニュアル 面接法」, 北大路書房, 198 頁